
インフィニット・ストラトス ～リベリオンの鷲～

白木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス 〜リベリオンの鷲〜

【Nコード】

N2444Y

【作者名】

白木

【あらすじ】

アメリカ陸軍所属のドミニカ・S・ジェンタイル大尉はある日IS学園への入学を命じられる。IS学園で彼女を待ち受ける出来事とは……！

注意：なお同じ作品がありますが作者は同一です。ですので運営に通報はなさらないでくれるとありがたいです

第一話　く鷲、飛び立つ（前書き）

どうも元アドニス、現白木です。

パソコンが壊れて島しましてその拍子にID関係のものが全部飛んでしまいました・・・（泣）

何とか使えるまでには復旧しましたので新しくIDを作り直しまして、また新しく投稿する事にしました。

これからよろしくお願いします

第一話　く鷲、飛び立つ

くアメリカ陸軍基地く

「全く、メンドクサイ・・・」

朝早くから陸軍大将に呼び出され、基地の長く無機質な廊下を歩いてる。本当にメンドクサイ・・・

「しょうがないですよ、上からの命令なんですから。」

そう言いながら私の一歩後ろを歩くのは私の『女房』役兼恋人のジエーン・T・ゴッドフリーだ。

うん、相変わらず可愛いな。

「まあいいさ、さつさとすませてパブにでも行こうか。」

「全く・・・。」

そう言うと、ジエーンは呆れたように言う。まあ、またどっちが先に酔つか勝負するか。

そう話している内に陸軍大将がいる執務室の前に着く。

コンコンッ

「ドミニカ・S・ジエンタイルです。」

『入れ。』

相変わらずちよっと頭にくる声だよ。私は苛々を隠さないまま思い

切りドアを開け中に入る。

「それで、何の用でしょうか？」

ズボンのポケットに手を入れたまま膝を曲げ、ガムを噛みながら要件を聞く。

「・・・今回呼んだ事については貴様も察しがついているだろう」

そんな私の態度が勘に触るのか大将の額に青筋が浮かぶのが目に見える。けど私もこいつがム力つくから態度なんて変えない。

「全然分かりません、とりあえずさつさと用件を言っして下さい。この後ジェーンとパプに行きますんで。」

ピキッ！

おお怖い怖い、また青筋が一つ増えたよ。手が震えながらも懷に手をやって一つの封筒をとりだす。

バンッ！！

机に叩き付け、まるでさつさと之を取って出て行けと言わんばかりの視線を私に送ってくる。

「それじゃ。」

私はそれをとると来たときと同じようにドアを思い切り開けて部屋を出る。

「大将！どうでしたですか！」

私が執務室から出ると、扉の近くに待機していたジェーンが走り寄って来る。まるで犬みたいだな

「いや別に何も無いよ、ただ封筒を渡されただけさ。」

そう言いながら封筒の封を切ると、中に入っていた紙の内容を読む。

「えゝゝゝ何々、『アメリカ陸軍第8航空軍IS特殊部隊『デザートイーグル』隊長

ドミニカ・S・ジェンタイル大尉にIS学園への入学を命ずる。』
だつてさゝゝゝ」

「へゝゝ、IS学園に入学ですかゝゝゝゝゝゝ」

ジェーンはそれだけを言うと笑顔のまま黙り込む。あれ、どうした？

「ジェーン、どうした」

顔を覗き込むが笑顔のままピキッと固まっている。何か驚くようなことでもあったか？

「つて入学うううううううううう！！！！」

「うわっ、どうしたジェーン？」

暫くするとジェーンが行き成り大声を上げる。何か驚くことでもあったのか？

「ちよつちよつと、本当に入学するですか！」

「何だ、そんな事か」

「ちよつ、そんな事つて!!」

ジェーンが何か言っているが気にしないで私の部屋に向かって歩き始める。

「大将!!何で入学する事にしたですか!!」

「別に、只なんとなくだよ。」

「だからって!何で大将いくですか!!」

「さあね、大方厄介払いのついでだろ。」

部屋に着き、ジェーンを置いて中に入る。中に入ると近くにあったシオルダーバッグに小説、あと簡易式通信機と簡単な着替えとかを入れて、外にでるとジェーンは又直に近づき言う。

「大将!何で大将はそんな命令がきけるですか!上の命令の真意にだって気付いてるはずです!」

ジェーンのいうとおり私は真意に気付いている。どうせ私がIS学園に入学させられるのは世界初のIS搭乗者、織斑一夏データの採取、そして調査だろうな。

全く、本当ならこんな命令聞かないんだがな……………

「私がこんな命令を聞くのはお前のためだよ。」

「えっ……………」

私の一言にジェーンは呆けた様な声をあげる。

「いいか、もし私がこの命令を拒否したら恐らくジェーンに被害が及ぶ可能性がある。」

「なっ、何故です……か?」

「私の近くに常にいるのは誰だ？」

「えと・・・私です！」

「そうだ。・・・だったら一番私に対する脅迫材料になるのは？」

「それハッ！！！」

どうやらジェーンも気付いたらしい。そう、たとえ私が命令を拒否しようが上層部はきつと私に行かせたがる。

どうしても拒否するなら奴らは絶対にジェーンを人質にとるはずだ。そうなったらジェーンにも被害が及ぶ。それだけは絶対に避けなければいけない・・・。だから私はIS学園に行くんだ

「大将・・・すみません、私のせいで・・・」

「私がジェーンを女房役に選んだんだ、自分を責める必要はないよ。」

「けど・・・ッ！」

これ以上ジェーンに文句を言わせないためにジェーンの顎に指をやり口付けをする。ジェーンの唇はとても柔らかくて、触れていて気持ちが良い・・・。

「んっ・・・」

「んんっ・・・／／／」

気付けばお互いに抱き合いながらキスをしていた。そして暫くして・・・

「大丈夫、適当に終わらせてくるよ・・・」

ジェーンから離れ、基地の出口に向かって歩き出す。

「たっ・・・大将！！頑張ってくださいです！！」

ジェーンの応援に私は前を向きながら手を振り、基地から空港に向けて歩み始めた。

キャラ説明

名前：ドミニカ・S・ジエンタイル

CV：渡辺久美子（WORKING!!!：白藤京子、ケロロ軍曹：ケロロ軍曹、ティルズオブヴェスperia：カロール・カペル、マブラヴオルタネイティブ：伊隅みちる）

誕生日：12月6日

年齢：16歳

身長：174cm

体重：教えるわけないだろ？体中に風穴開けてやろうか？

趣味：ボクシング

通称：ワンマン・エアフォース

特徴：戦闘方法は単純明確で、突っ込んで撃って落とす、これが戦い方だがこれはジエーン大尉がいて初めて成り立つ戦闘方法。

これから彼女は独自の戦い方を見つける予定。

備考：祖父母はアメリカに渡ったイタリア系移民。両親の愛情を受けて育ったが決して裕福とはいえず、幼い頃からジャンク屋などの手伝いで生計を立ててきた。

だが、篠ノ之束の開発したマルチプラットフォームスーツ『インフィニット・ストラトス』の登場で彼女自身にISの適正が高い事が判明。そこからIS搭乗者となり、活躍していった。

なお、ジエーンに対する愛情表現はストレート

専用機：P-51Dノースリベリオン通称『シャングリ・ラ』

装甲は全体的に薄く、一撃離脱の戦法が取られる機体。色は全体的に淡い緑と所々に白のペイントがしてある。

右肩の側面には今まで倒してきたISの数だけ星がペイントされている。

そして左肩の側面には自身の部隊称である、ボクシングをする鷲

が描かれたペイントをしてある。

武装：M1919A6改（装弾数：800、予備弾薬：3200）
通常は250発しかないがドミニカ自身が改造した為、800発まで増えている。

コレットM1917リボルバー（装弾数：6、予備弾薬：100）

刃物は彼女自身が好まないため、装備されていない。

彼女のISにはまだまだ隠し武装などが搭載されている。

第二話　く鷲、向かう

く日本、羽田空港く

「ここが日本か、相変わらず狭苦しい所だね・・・」

羽田空港の片隅で、私はガムを噛みながらそんな事を呟く。

「まつ、さつさとホテルに着いて一杯遣りたいところだ・・・」

一応私は16歳だが、政府から特例で未成年飲酒が認められている。それでも周りからはとめられるがな。

つて、私が一体誰に話しているんだ？

まあ、いい。肩に背負っていたショルダーバッグを背負いなおし、羽田空港の出口に歩き始めたときにある事を思い出した。

「しまった、ジェーンとパプに行く約束してたのを忘れてた。」

く東京スカイホテルく

あれから交換所でアメリカドルを日本円に交換して、私はホテルの最上階で休んでいた。最上階から見える景色はとも見ごたえがある。

取り合えずショルダーバッグを机の上に置き、服を脱ぎタンクトップと下着一枚だけになる。

「ふう、全く疲れるな・・・」

ベッドの上に座り、日本に来るときに持ってきたビール缶のプルタ

ブを空け、ビールを飲む。

「ジェーンは向こう、私はこっちで一人。何時もと戦い方を工夫しなきゃな・・・メンドクサイ」

グイッとビールを飲みながら戦い方を考える。

「（私の戦い方はジェーンがいて初めて効率よく戦える。けどあいつは今はいない・・・・・・。昔の戦い方で・・・いや、今あの戦い方でやったら確実にあれ《・・・》が公になる。本当に面倒くさい・・・・・・）」

「全く、ジェーンも来てくれれば良かったんだが・・・」

ビール缶を一気に煽り、残っていたビールを全部飲み込む。

飲み終わった缶をゴミ箱に向けて投げる。投げられた缶は弧を描きながらゴミ箱に綺麗に入った。

「まあいいさ、私は私なりの戦い方をするだけさ・・・・・・」

そのままの状態でベッドに寝転がると、そのまま目を瞑り意識を落とした。

ドミニカ side end

ジェーン side

「大将・・・・・・」

ジェーンは自室のベッドの中で自分が敬愛し、好きであるドミニカ

の事を考えていた。

最初会った時の極秘作戦の事を思い出す。あの時は何があったか分からない、ただ分かるのは、敵に囲まれて、もうダメかと思っても、そのたびになぜかどうにかなっちゃって、まるで魔法みたいだったという事だけだった。

その後も気付いたら強引にドミニカの相棒にされるなど色々あったが今では公私両面でドミニカの女房役を勤めている。

だが既にジェーンとドミニカは女房役という枠を超えてお互いを好きあっている。

その事を考えるだけでジェーンの顔はだらしなく緩みきり、ドミニカが帰ってきたときの事を想像している。

「大将、待つてるですからね！」

そう言うと、ジェーンは眠りに着いた。

ジェーン side end

ドミニカ side

「んん．．．朝か．．．．．」

カーテンの隙間から覗く日の光で目を覚ます。何か夢でジェーンを見た気がする．．．、きつとジェーンも私のことを夢で見てたんだろうな．．．。

「何処に入れたか．．．．．」

そんな事を呟きながらシヨルダーバッグを漁る。可笑しいな、確か此処に入れた……。

「あつたあつた……。」

私がシヨルダーバッグから取り出したのはIS学園の制服だ。普通IS学園の制服はミニスカートが基本だが許可さえ出せば自由に改造してもいいという決まりだ。

そういうことで私の制服は普段の私服をイメージして改造してある。改造制服を袖を通し、私は近くにあつた椅子に座る。

「あとは来るのを待つだけ……か……。」

そんな事を呟きながらある人物が来るのを待つ。

コンコンッ

「空いてるよ」

ガチャッ

私がそう言つと、部屋の外から黒いスーツを着た女が入ってくる。

「貴様がアメリカからの新入生、ドミニカ・S・ジェンタイルか？」

「ああ、そうだよ。でっ、あんたが『ブリュンヒルデ』織斑千冬つてわけね」

「そうだ」

外から入ってきたのはIS学園の教師である、織斑千冬だ。第一回
モンド・グロッソで優勝した伝説のIS搭乗者だ。

「全く、まさか私が学校になんか通う羽目になるなんて・・・、今
頃ならジェーンとパプに行ってたのにさ・・・」

「未成年が酒を飲むな。」

「かたつくるしいね・・・気楽に行こうよ」

椅子から立ち上がり近くにあったショルダーバッグを肩に掛け、扉
に向かう。

「さつさで行こう。いい加減ホテルも飽きたんだ。」

「・・・まあいいだろう。行くぞ」

私がそう言つと千冬が先に部屋から出たから私は後に続いて歩く。

「しかし、驚きだよ。まさか男でISを使える奴がでるんなってな。」

「

「貴様も・・・、その事でIS学園に入学するために来たのか？」

私がそう言つと千冬は声を押し殺し、殺気を込めて私に問いかける。
全く・・・ブラコンは怖いよ。

「さあね、けど上のやつらはそう考えてるかもな・・・」

答えるのがメンドクサイし、私は適当にはぐらかしながら腕を頭の

後ろで組み、ガムを膨らませる。

「ドミニカ、お前がもしも一夏に危害を加えるというなら・・・私はお前を・・・『ストップ』」

言葉の続きを止める。説明してもしなくてもどっちみちメンドクサイ道にそれるのか・・・。ホントメンドクサイ・・・。

「私は織斑一夏には興味はない。だから危害を加えるつもりはないよ」

「その言葉に偽りはないな？」

「当たり前さ・・・」

「そつか・・・」

私の言葉に千冬は殺気を収める。けど・・・。

「それに私はジェーンにしか興味がないさ」

ピキッ

空気が固まりひび割れた音が鳴った・・・気がする。私の言葉に千冬はゆっくりときこちなく私のほうを振り向く。

「・・・まさかとは思うが、ドミニカ、お前は・・・同性愛者か？」

「さあ、どうだろうね？唯一つ言える事は男には興味がない。好き

なのはジェーンだけさ。」

「そ、そうか……………」

私の発言に千冬は何処か引いたような感じをしている。全く侵害だな、人の趣味は人それぞれだというのに……。

そうこうしている内に表にある千冬の車が見えた。

「アレに乗れ、早く学園に行くぞ」

「はいはい……………」

ガムを膨らませながら、車に乗り込む。千冬も運転席に乗り込み車を発進させた

第三話　く鷲、到着く

私が千冬の車に乗って約数十分、車内には会話らしい会話など無くもうIS学園が目と鼻の先と言う所まで来てる。

「あれがIS学園、ね・・・」

後ろの座席にふんぞり返りながらIS学園を見て、そんな事を呟く。

「そつだ、お前が三年間通う事になる、IS搭乗者専用の学園だ」

その呟きを聞き取っていたのか、千冬はそう言う。

「あつそう・・・、ジェーンには何を買っていたやるか・・・」
「」

千冬の言葉を適当に返し、本国で待っているジェーンに何を買って送ってやるか考える。・・・あつ。

「あつそう言えば・・・」

「どうした？」

「いやね、私のクラスは何処かなくなって思ってたね。」

「お前のクラスか・・・少し待て・・・」

千冬はそう言うとう右手でハンドルを切りながら左手で空中にパネルを投影し、私のクラスを調べる。おいおい、それで事故られたら私

が困るんだが・・・

「・・・・・・・・お前のクラスは一組だ。担任は私だ。だが・・・・・・・・」

一体なんだってんだ？

「千冬、どうしたんだ・・・・・・・・？」

「私は色々あつて授業に出られない時もある。その時の為に副担任の他に、臨時の担任がいるんだが・・・・・・・・お前も名前ぐらいは聞いたことはあるだろうが・・・・・・・・グンドユラ・ラルだ・・・・・・・・」

「げっ・・・・・・・・グンドユラ・ラルかい・・・・・・・・。」

グンドユラ・ラルっていうのは第一回モンド・グロッソに出場したドイツ国家代表であつた女だ。

あいつは鋭い観察眼、見越し射撃。芸術的な射撃技術を持つがその実、凶暴的な戦い方をするから相手のISを殆ど大破させて勝ち上がった女だ。

けど、準決勝で目の前で運転している千冬に負け、結局は三位で終わったが実力は今でも衰えていないらしい・・・・・・・・。

そんな奴が臨時担任・・・・・・・・。

「・・・・・・・・どうした？」

「・・・・・・・・なあ、千冬」

「・・・・・・・・何だ？」

「IS学園、辞めて本国に戻っていいかい？」

「駄目だ、こんな事をいたくは無かったがラルはお前を大層気に入ったらしい……。恐らくだがお前が本国に帰ったらあいつはアメリカに一人突撃しかねないぞ……。」

「そりゃ勘弁願いたいよ……。」

それだけをいうと頭の後ろで手を組んで、目蓋を閉じる。

そのまま数分間沈黙が奔る。暫くするとIS学園に着いたのか車のエンジン音が止んだ。

「着いたかい……。」

私はそう言つと車から降りる。

「全く、ホント憂鬱だよ……。」

それだけ言つと私は学園の入り口に向けて歩き始める。

「それじゃ、私早く行こうよ。担任のあんたが遅いと示しがつかないだろう?。」

「言われなくても判っている。それと……。」

ヒュッ

千冬がいつの間にか手に持っていた出席簿で私の頭を叩こうとする

けど、頭を軽く動かし、それを避ける。

「避けるな。」

「避けるさ、痛いのは嫌いなんだ。」

私は千冬から逃げるように校舎に向かって走った。

「ドミニカ・S・ジエンタイルか……………」

千冬のそんな呟きが聞こえた気がしたが、私は気にしないようにした。

IS学園〈一年一組前〉

「ここが一組ね……………」

「そうだ、それと連絡だ。お前は一応新生扱いだと思っているよ。うだが違う。遅れてきた転校生という扱いだ。」

おいおい、初耳だよそれは……………」

「おいおい、私は上の奴らに入学だって聞いたんだけど？」

「お前……………今日が何日だと思っている？」

「えっと……………4月20日」

「そうだ、IS学園の入学式は今から約一週間。お前は入学式に出ず何処をほっつき歩いていたんだ？」

「そりゃ勿論・・・・・・・・・・」

「勿論・・・・・・・・・・？」

やばいねこりゃ、之を話したら明日の朝日を拝めるかどうか・・・

「・・・・・・・・連日日本の居酒屋やバーにいつて酒を飲んだ・・・」

「こんの・・・・・・・・馬鹿者がッ!!!!!!!!!!!!!!」

ドゴンッ!!!!!!!!!!!!!!

「アガアッ!!!!」

痛い！これはさすがに痛い！！あの音出席簿から出るべき音じゃない!!!!!!

「まあいい、私が先に入る。お前はそこで反省している・・・・・・・・」

私が頭を抑えてのた打ち回ってるそばで、千冬はそれだけを言つと教室に入つていった。

S I D E F r e e

教室では沈黙が奔っていた。何故なら先程教室の外で聞えた音が原

因だ。千冬の怒鳴り声と共に出席簿で叩いたとは到底思えない音がしたからだ。

ガラッ！！

千冬が教室に入り、さらに緊張が走る。なぜなら顔が怒りで赤くなっていたからだ。

「・・・・・・・・今からHRを始める前に、転校生を紹介する・・・・・・・・。ドミニカ、入って来い・・・・・・・・」

怒りを抑えているのか声が震えているのが分かる。そのことがさらに皆に恐怖を感じさせる。

一体だどんな奴が千冬をこんなに怒らせるのか？皆がそう思いながら入ってくるのを待つ・・・・・・・・

Side out

アレから痛みが引き、何とか立ち上がることができた。くっそ、たんこぶできてないよな・・・・・・・・。

まあいい、取り合えず呼ばれた事だし入るか・・・・・・・・。

ガラッ

教室のドアを開け中に入る。ありゃ？何でこんな皆黙ってるんだ？そついつて皆の視線の先には・・・・・・・・

「あつ、狂戦士《バーサーカー》」

「誰が七騎士の一人だ！」

バシンッ!!!

「あつ、危ないじゃないか………」

今度は真剣白羽取りでガードする事ができた……危ないな……

「さつさと自己紹介しろ……!!」

これは危ない。起爆直前の爆弾状態だよ……

「アメリカから来たドミニカ・S・ジエンタイル。一応軍所属のIS搭乗者で専用機を持つてゐる。趣味はボクシング。これからよろしく」

「お前の席は左から二番目の後ろから一番目の席だ。」

「はいはい……」

「返事は一回だ」

バンッ!!!

「つ~~~~!!」

ボカス力殴りやがって……瘤になったらどうするんだ……

頭を抑えながらも席に着く。窓際に近くて日当たりがいいねこの席は。

「今日の日程を伝える。今日はこの後ISの動作、造りなどの授業を基本的に行う。昼食後の昼からは通常授業だ。判ったな。」

『はい!!』

元気がいいね、全く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2444y/>

インフィニット・ストラトス ～リベリオンの鷲～

2011年11月8日20時11分発行